

夏目漱石『一夜』

Junko Higasa 2016.3.14

明治 38 年 7 月 26 日。諸葛孔明のように鷺鳥の扇を使う軍師のような、あるいは学者のような髭のある男は「美しき多くの人の、美しき多くの夢を…」と思案し、下位兵士に多発した脚気を気にする髭のない男は「夢なれば、描けども成り難し」と語り、男社会に翻弄される艶なる女は「せめて夢でも美しい国へ行かねば」と思う。同宿一夜という限られた時間帯に集約された夢は、三種三様の生涯を表すと共に、一つの人生の中の連動でもある。その夢の話は途中で流れ、彼らは眠りに就く。そのとき初めて人間は自我から解き放たれて万物共通の太平を得る。

そして以下の名前が挙がる。正義の神ゆえ正義に固執しすぎて赦すことを知らず「苦しみは自らに帰結する」世界に身を置いた阿修羅。「善と悪のように相反するものは、別々のものではなく、同一のものの表裏」と説いた維摩居士。「善悪は客観ではなく主観であり、悪い夢さえ見なければ、小さな胡桃の殻の中に在ろうとも、自分が広大な世界の王だと思えることができる」と言ったハムレット。

希望が野望に変じる月日に惑わされ、己を欺いて徒に時を過ごしては智者とは言われまい。どんな小さな世界にも蒼天と大地がある。その中で自分が最高だと思える分子を掴めれば、自ずと人生が成る。善悪界の外で情緒を担う道徳的分子を以て幾ばくか世の色を変ぜん。そして非人情『草枕』が出来た。